

この事件を題材に「水を引いた男」という小説が第51回岩手芸術祭・奨励賞一席で発表されています。

追跡・捕縛

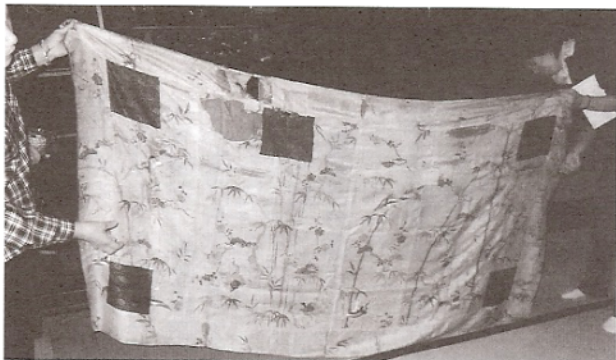
発生地女川では大騒ぎになり、藩の捜索も進み足取りを追って気仙の高田にいたり土地の顔役藤七のもとにいたりします。

歌詞：

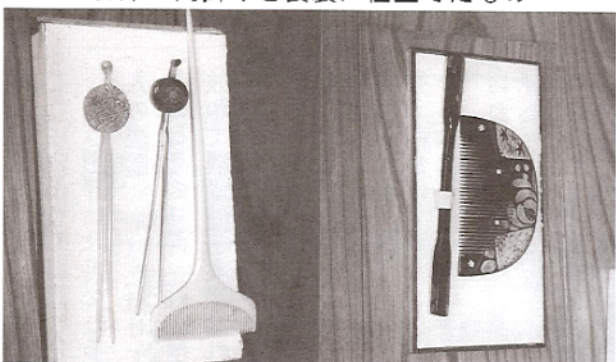
そこで藤七 思案が御座る
彼ら式人を取らせるならば
望み次第に 金とるものと
初め不憫は 皆打忘れ
欲と悪とに 心が変わり
小人同心 我家にとめて
明けて翌日は 案内なして
五人連れ立ち南部へ越えて
兼ねて陰せし 藤七なれば
直に五人は 仁助がもとへ
尋ね参りて 対面なさる
我等仙台 御小人なるが
御上御意にて 是まで下る
二人召し取る 我々なるが
御身教えて取らせてたもれ
陰し置いては身の為ならず
そこで仁助は 不憫に思い

是は御無理な仰せで御座る
我等片には 存せぬ事よ
脇を探して 御詮議なされ
そこで御小人荒気を見せて
叱りつけたり威してみたり
そこで仁助は 申さる様は
たとえ水責 火責になれど
我等片には 存せぬ事よ
出す心は 見えざりければ
詮議厳しき 仁助が難儀
二階座敷に 忍びし式人
かくの様子を 立聞き致し
たるにあられる 身をたえ
兼ねて
さらば我々 是迄なるよ
どうで通れぬ 覚悟の前よ
そこで奥様 申さる様は
向う相手は 五人と見る
命限りに 戦うならば
五人十人 数にも足らず
先ずは一太刀 戦いみると
流石奥様 手練にあれば
小棲かい取り鉢巻きしめて
次ぎに喜右工門続いて出て
紺の櫛に 鉢巻き締めて
得物得物をてんでに提げて
やがて二階を ささらさら降
りて
日塔喜右工門 奥様お節
二人是にて 見参せんよ

知らぬ仁助に 詮議は無用
覚悟極めし 我々なれば
娑婆の土産に勝負をせんと
名残ながらも早切り掛かる
そこで同心 御小人共は
是は荒気で 叶わぬものと
いかに申さん 人々達は
主を殺せし 天罰なれば
ここを切抜け 落ち行くと
ても
天の網をば 通れはせまい
我等御上の御意こうむりて
上に手向かう 大科なるよ
卑怯なさるな 人々
達よ
此処を切抜け 落ち
行くとても
上の御威勢で 召し
取るならば
尋ね出されて 猶罪
深し
罪は重なり 通れは
せまい
ここの道理を 聞き
合給え
そこで二人は 誠に
思い
西に向いて 念仏唱え
わざと我が手を 後
に廻す



お節の内掛けを袈裟に仕立てたもの



櫛とかんざし

どうぞ通れぬ 我々なれば
されば是にて 縄打ち給え
そこで喜右工門早縄かかる
お節様には 手錠をおろし
先ずは喜右工門 馬へと乗
せて
次ぎに奥様 駕へと乗せて
前後厳しく取り巻きければ
仁助夫婦は 見る日に泪
そこで奥様 仁助に向い
長の親切 過分で御座る
とてもこの世で 会われは
せまい
長い未来で会うものならば

恩は忘れぬ 夫婦の衆よ
泪ながらも 声さえ曇る
仁助夫婦は 名残の泪時刻
移れば 同心小人胸の不憫
は 面に見せず見えぬ地獄
はいざしらねども
今の浮き世は 五匹の鬼よ
南部釜石 引かれて通る是
を見る人 聞く人々は袖を
ばしぼる
二人が捕って仙台への護
送が始まったところで釜石
の場面が終わります。